

2024年10月6日（日）主日朝礼拝説教

『良い羊飼いと偽の羊飼い』 井上隆晶牧師

エゼキエル 34 章 4～6、11～12 節、ヨハネによる福音書 10 章 1～12 節

①【本当の羊飼いの声は分かる】

1～2 節「羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。門から入る者が羊飼いである。」とあります。旧約聖書では神はよく羊飼いにたとえられ、人は群れの羊としてたとえられました。有名なのは詩編 23：1～3 で「主は羊飼い、わたしには何も欠けることはない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる。」があります。ですから羊とは人間をさしています。「羊の囲い」とは「この世、共同体、教会」のことでしょう。「門」とは何でしょう。パレスチナでは村全体が共同の羊を入れる囲い（小屋）を持っていて、村中の羊が野原から帰って来るとそこに入れられました。その囲いには扉（門）があり、門番だけが鍵をもっていて、村人に雇われた正式な羊飼いにだけ扉を開けました。

ここでは「門から入る」という表現で、イエス様は神から遣わされた正式な羊飼いであることを言っているのです。正式ではない羊飼い、偽りの羊飼いが大勢世に現れていたからです。当時の社会を導いていた指導者たち、特にファリサイ派、サドカイ派、熱心党、ヘロデ派、エッセネ派などがそうです。羊である民は、彼らの声を聞かないで、本当の羊飼いであるイエス様の声に従うというのです。羊はその声を聞き分け、他の者にはついていかないと書かれています。面白いのは「その声を聞き分ける。」(3 節)「羊はその声を知っている」(5 節)「ほかの者たちの声を知らない」とあることです。牧師さんの説教を聞いた時、「ああ、これは確かに神様からの言葉だ」と分かるということです。偽物の牧師さんの説教を聞いても「これは神様からの言葉ではない、何か違う」と言って聞こうとせず、その牧師さんから「逃げ去る」(5 節)のです。信者さんの中には油があって、本物と偽物を見分ける事が出来るからです。「あなたがたを惑わせようとしている者たちについて書いて来ました。しかし、いつもあなたがたの内には、御子から注がれた油がありますから、…この油が万事について教えます。」(1 ヨハネ 2：26～27) この油とは聖霊のことです。聖霊は自分と同質であるキリストと違う匂いのする偽の教師を見分け、信者に教えます。偽り者はキリストの香りがせず、異質な匂いがし、何か危険を感じるのです。

●これは今も本当に起こっています。信者を散らす牧師さんの話を聞いたことがあります。某教会は 100 名近い信者がいたのですが、その牧師さんが来たときに 30 名に減ってしまいました。その牧師さんは信徒に向かって「12 時まで教会にいてもいいです。それ以降、礼拝堂にいたら警察を呼びます」と言ったというのです。それやあ皆逃げますよ。

②【イエス様を通して命にいたる】

7 節に「わたしは羊の門である。」とあり、9 節に「わたしは門である。わたしを通して入る者は救われる。」とあります。今度はイエス様は自分のことを「羊の門・門」といわれます。エルサレムは城壁で囲まれており、外に出るためには門を通らなければなりません。その中に「羊の門」という名前の門があり、羊飼いたちはこの門を通して羊を牧場に連れて行きました。同じように私たちが永遠の命を得るためには、イエス様を通らなければならないのです。キリストこそ父なる神に至る門、天国への門です。イエス様は天国とつながっているのです。偽の門を通ると、死に至り、闇に至ることがあります。「わたしを通して入る」とは、洗礼式を象徴しています。洗礼とはキリストと一体になって死に、復活することです。キリストと一体になるからこそ天国に入れるのです。

●都島拘置所に行くとゲートがあって、そこを通るとだいたい皆ここで「ピー」と鳴ります。そこで金属探知機で身体と持ち物検査をされ、携帯や持ち込めない物を外に置いていけなければなりません。天国に入るのにも、持って行けない物があるのです。それを捨てる事を「死」といいます。キリストと異質なものの、朽ちるもの、悪い思いは自分にこびりついていきますから、それを捨てる努力が死ぬことです。

③【キリストは良い羊飼いである】

10～11 節に「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」とあります。4 世紀のクリュソストモスは「彼がわれわれを父なる神のもとへ導く時には、自らを門と呼び、われわれを守られる時には羊飼いと呼ばれる。」とっています。ここではイエス様は自分のことを「良い羊飼い」と言われました。なぜなら「悪い羊飼い」がいたからです。「悪い羊飼い」の特徴がその前に書かれています。彼らは強盗と呼ばれ「盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりする」(10 節)と書かれています。彼らは神のため、あなたのためと言って近づきますが本当は自分の利益のためです。自分のために人を利用し犠牲にします。悪魔の働きははっきりして「破壊」です。神と人間の関係を破壊し、人間同士の信頼関係を破壊し、社会を破壊します。これが悪から来たものしるしです。一方イエス様はその反対であって破壊されたものを回復し、修復し、二つのものを一つにするために来られました。結んでゆく、癒し、命を与える、これが神から来たものしるしです。イエス様は羊である人間に命を与えるために来られました。単に命を受けるだけではなく、豊かに受けるためです。両手で受け取っても溢れてしまうほどに豊かな命を与えるために来たのです。

「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」とあります。本当の羊飼いは人間のために自分を犠牲にし、命を捨てます。良い羊飼いがどんどん小さくなって、貧しくなって、反対に羊はどんどん大きく成長し、豊かになるのです。羊が大きく成長

し、元気になり、生き生きとすることが羊飼いはうれしいのです。

④【なぜ聖職者というものができたのか】

私が教会史で学んだことですが、初代教会にやがて三つのものが揃ってきました。それが「聖書」「信条」「職制」（聖職者制度）です。「職制」とは「監督、長老、執事」という信徒とは別の専門職ができたということです。監督とは今でいう「主教、司教、議長」に当たります。長老というとプロテスタントでは信徒ですが、本来は按手を受けた司祭であり「神父、牧師」のことをさします。執事も信徒ではなく、ステファノやフィリポのような「補祭、助祭、伝道師」（英語でディーコン）のことで、このような制度は教会の権力者たちが作った悪であると主張する人たちがいますが、それは間違いです。それは権力から出たのではなく、神の権威から出たものです。教会は放っておけば、無秩序になり混乱します。コリント教会がそうでした。私は神からの啓示を受けたと言って、使徒やパウロたちを差し置いて、自分がリーダーだと主張する偽の福音を語る教師たちがどんどん入って来ました。ゆえにパウロは「神の言葉はあなたがたから出て来たのでしょうか。あるいは、あなたがたにだけ来たのでしょうか。」（I コリント 14：36）と語ります。だから使徒の教えを引き継ぐ者として教師が定められたのです。聖職者制度は差別であって悪である、教会はみなフラットでなければならないという人がいますがそれも違います。それは差別ではなく区別です。区別は悪ではありません。区別は働きの為です。男女という区別は働きの為に神が創造されたものです。選びがあるということ自体、最初から区別されているということです。神が教師を区別して立てたのも、その働きをもって信徒に仕えるためです。聖書の読み方でもそうです。どのように読んでも良いなら人の頭数ほどの解釈が出てきます。統一協会ですえ私たちと同じ聖書を使っているのです。でも違った解釈をします。それで良いのでしょうか。だから信条を制定する必要が出て来たのです。みんな必要だから生まれて来たのです。「神は無秩序の神ではなく、平和の神だからです。」（I コリント 14：33）

● 4世紀のコンスタンチノーブルの主教クリュストモスは祭司になるように望まれた時、辞退する意味で「祭司論」を書きました。その中で「自分自身のために祭司となることは誰でもできるし、自分一人の救いを全うすることは容易であるが、多くの人のために祭司となり、彼らに救いを与えることは容易なことではない。この祭司はただ少数の者のみ成し得ることである。なぜなら世のため、神と人との仲介となるものだからである。祭司は荘厳な権威を上から与えられている者であって、天使たちより高いその位置は、神の造られたものだからである。祭司はキリストと同じ像を持ち、迫害に耐え、自らは神への供え物となり、多くの人のために命を捨てる者でなければならない。到底自分のごとき者に出来る務めではない。」と書いています。

私は自分が良い羊飼いだとは思いません。エゼキエル書にこうあります。「お前たちは…群れを養おうとはしない。…追われた者を連れ戻さず、失われた者を探し

求めず…」(エゼキエル34:2~4)。私も同じです。何人も散らしました。失われた者を積極的には探し求めていません。天国で主からお叱りを受けるでしょう。今までいろんな良い牧師たちを見てきました。昔の牧師や神父は信者さんに時間をかけました。信者のために3000万円の謝金の保証人となり、支払った牧師を知っています。夜中に教会の信者の家の前に行き、一軒一軒祈って回った牧師もいました。コルベ神父の様に身代わりになって命を捨てる人もいました。キリストの愛がそうさせたのです。理屈ではなく、愛の実践です。それが本物の牧師だと思います。私など足元にも及びません。私は皆さんのことをイエス様のもの、イエス様の羊だと思っています。私が命を捨てて買い取ったのではなく、イエス様が買い取ったからです。皆さんに仕える事はキリストに仕える事であり、どの教会の信徒でも仕えたいと思います。羊を養わなければキリストに怒られると思います。私が良い羊飼いになれるように祈って下さい。キリストの後に従い、彼に似た生き方ができるように祈って下さい。